

かかりつけ薬剤師の電話モニタリングが薬物治療の安全性に及ぼす影響

後藤 沙矢香¹⁾、滝川 晃司¹⁾、儀仁 さより¹⁾、山室 美和¹⁾、金 順伊²⁾、保坂 茂³⁾、
前田 守⁴⁾、長谷川 佳孝⁴⁾、月岡 良太⁴⁾、森澤 あずさ⁴⁾、酒井 雅人²⁾、
大石 美也⁴⁾

- 1) 株式会社あさひ調剤 あおば薬局
- 2) 株式会社あさひ調剤
- 3) 株式会社あさひ調剤 あさひ調剤薬局 小川店
- 4) 株式会社アインホールディングス

【目的】来局間隔が長くなる長期処方患者では、投薬時確認だけでは体調変化などの適時把握が困難である。しかし、薬局薬剤師がかかりつけ機能を発揮するためには、次回来局時以外でも安全に薬物療法が継続されているかを確認し、これを医師に情報提供することも重要である。そこで本研究では、来局間隔内での電話モニタリング(以下、モニタリング)を実施し、その効果を検証した。

【方法】2018年5~7月に来局した当薬局にかかりつけ薬剤師を持つ患者に事前承諾をとり、以下3ケースのモニタリングを実施した。1.処方変更(新規、削除、増減量など)の7~10日後(n=34)、2.前回来局日と処方日数から予想した来局日を2日過ぎても来局しない(n=37)、3.ハイリスク薬を服用し、その副作用が疑われる兆候があった(n=13)

【結果】期間中の平均処受付回数1,644回/月、かかりつけ薬剤師指導料算定件数は530件/月(32.3%)であり、その算定率は当グループ1006店舗の平均算定率4.9%よりもはるかに高かった。処方変更例では、6件(17.6%)の体調変化等を医師に情報提供した。未来局例では、8件(21.6%)の受診忘れを発見した。ハイリスク薬患者例では、1件(7.7%)が処方中止に至った。

【考察】モニタリングによって、処方変更後の体調不良や処方中止に至る副作用の重篤化などを次回来局前に発見でき、また受診忘れによる服用中断を予防でき、安全かつ効果的な薬物治療の継続に貢献できる可能性が示された。特に当薬局はかかりつけ機能の発揮が強く、薬薬連携強化にもつながり、本施策の効果的実施につながった。今後の処方長期化の進展に対して、モニタリングを継続実施するとともに、服薬指導時でも注意事項を患者と共有して自発的な相談を促し、双方向コミュニケーションの構築によりさらなる薬物治療の安全性の担保に貢献したい。

(日本薬学会第139年会(2019年3月、幕張)にて発表)